

森のある大学 —市民と大学人が作る共生きの森—

江南 和幸

ご紹介いただきました、江南でございます。皆様ご来場ありがとうございます。まずは、金沢の大雪のお見舞いを申し上げます。そちらは大変な大雪だと言うことですが、それに反して、こちらの琵琶湖側は冬場でマイナス70センチという超低水位という有様で、ともに森を里山を持つ大学とはいえ、2つの大学は大変異なった環境にあります。その異なった環境にある大学が森をどのように生かしていくか、それぞれの環境に応じて異なることもあれば、共通なところもあります。それを、まず双方の大学でそれぞれ紹介しあおうということで、最初に龍谷大学の里山活動のビデオをご紹介させていただきます。

【VTR】(カラーページpp.12~18参照)

里山は人間が長期にわたって手を入れ、自然と多様な形で関わり、自然と共生する事によって、人間同士の共存を可能にしてきた場所でした。日本の生物の多様性は、里山の存在によって維持されてきたということも明らかになりつつあります。ところが、エネルギー革命と農業革命のため、里山は放置され、さらに都市の膨張とともに開発のターゲットにされてきました。生物多様性を維持し、人間の生活を支え、日本文化の形成にも密接に関連していたと考えられる里山が失われようとしています。このような状況の中、龍谷大学では、「共生きを目指すグローバル大学」という建学の理念に基づいて、2004年度文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業の採択を受け、里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センターを設立しました。これは、市民と教員とで作る「龍谷の森」里山保全の会における活動経験を活かし、里山の総合学術調査研究と保全を

通じた教育活動を実践するものです。

1989年、京都の街の中にあつた龍谷大学は、滋賀県大津市の古くからの里山である瀬田丘陵の一角に新しいキャンパスを開設しました。滋賀県と大津市との誘致により、全く偶然にも大学と森とのつきあいが始まりました。訪れる人の誰もがびっくりする、入り口の小山は緑の丘陵を切り開いたキャンパス造成に心を痛めた、当時の千葉乗隆学長の強い要請で残されたものです。その後、大学は隣接の雑木林約38ヘクタールを購入しましたが、アセスメントの途中、厳しい保護が求められている、絶滅危惧種であるオオタカの生息が確認され、龍谷大学全体の大多数の教職員の要望と、当時の上山大峻学長の英断によって、大規模開発の中止が決まり、学生の環境教育や大変人気のある市民環境講座のフィールドとして活用され、今に至っています。「龍谷の森」と私たちが呼ぶ隣接山地はこの写真に見られるように、開発が進む都市近郊に残された貴重な里山です。写真左上に見えるのが琵琶湖で、そこから流れているのが瀬田川です。2キロメートルほど離れた田上山地の堂山山頂から眺めた瀬田丘陵は琵琶湖沿岸に広がる住宅地の緑の借景であり、また二酸化炭素の吸収源として大きな意味を持っています。

荒れた里山も3月ともなればコバノミツバツツジの花が咲き乱れ、秋にはコナラやタカノツメの紅葉が美しく彩ります。しかし、厚い藪やイバラに遮られ、森の中にはなかなか入ることが出来ません。森の中のあちこちに転がる、枯れ木や大木を取り除き、少しずつ人が入れるようになりましたが、森の道の復活に最も大きな力を発揮したのは、瀬田北小学校の児童たちでした。課外授業で森に初めて入った児童たちは、初めて木を切り、すっかり森の魅力に取り付かれ、森のメインルートのひとつを切り開いてくれました。

森の中へ入ると、荒れ果てた里山のイメージとは違って、思いがけぬ命の営みが繰り広げられていました。オオタカの巣が見つかったばかりでなく、オオタカが周囲の田で捕らえたコサギを食べた跡や、森の先住民のタヌキの交信の場である溜め糞が、森のあちこちに見つかり、やがて、そこから糞に運ばれた柿の種が芽を出し、木々が更新される姿が浮かび上がりました。

昆虫もまた、森を生活の場としています。嫌われ者のスズメバチも森の命の循環の大切なメンバーです。コナラの林の一角、天井がぼっかりと開いたところには、貴重なサユリが花を広げ、あちこちで絶滅が心配される野生のラン科の植物がひっそりと

生えるのが見つかります。過度な植林が指摘されるヒノキ林も里山では、ムヨウランやミヤマウズラの小型のランの格好の棲家をつくります。また瀬田丘陵はキノコの隠れた王国として専門家の熱い視線が注がれるようになりました。日本新産のベニイグチは瀬田丘陵で発見され、つい最近新しい菌種として記載されたサザナミイグチは、今のところ瀬田丘陵だけで見つかります。

森は今や、龍谷大学の貴重な教育のフィールドとなり、毎年多数の学生が環境教育の実習をここで受けます。学生だけでなく、森はいろいろな世代の市民交流の場となっています。子供たちが集めているのは森の落ち葉。落ち葉を何に使うのでしょうか。集めた落ち葉を画用紙の上に並べて、なんと出来上がって見れば、落ち葉の押し絵のカレンダーでした。来年1年間いつも楽しい森の思い出がよみがえります。

落ち葉を集めるのは子供たちだけではありません。冬の落ち葉掻きは、今では大津環境フォーラムを中心とした、市民の年中行事となっています。集めたコナラの落ち葉を穴に積み上げて、童心に返り踏みつけます。子供たちも加わり、そろそろ今年の落ち葉たきも終わりに近づきました。昨年の堆肥の穴からは、思いもかけぬカブトムシの幼虫が200匹以上も出てきました。人の営みが昆虫の世界を広げているのです。1年間の労働の報酬は最上級の腐葉土でした。腐葉土だけでなく、抜き切りしたコナラを使った本格的なシイタケ栽培は、市民の大きな楽しみです。

こうして、偶然にも森を持つこととなった龍谷大学は、森の保全への大学人の熱い心を軸にすえて、それを受け止める熱心な学生、自然環境の再生に未来を託す市民の圧倒的な支持を受け、学問を市民に開放する新しい大学を目指す研究を続けています。また、里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センターでは、これからも里山での生物多様性の維持機構、里山と人間との関わりの歴史、現代社会での里山の位置づけなどについて、地域市民や行政とのパートナーシップを築きながら、総合的な調査・研究を行っていきます。

ただいま、龍谷大学の里山の活動の一端をお見せいたしました。それでは、今ご紹介いたしましたように、森を持つこととなった龍谷大学ですが、森を持つことと大学の教育・研究とはどのようなつながりがあるのでしょうか。ここではもう少し、森が教えてくれた大学における学問・研究のありかたを、私たちなりの大学人なりの見方で少し述べさせていただきますと思います。

大学のもつ第一義的な意味というのは、もちろん学生に教育を施す、未来の時代の担い手を送り出すということですが、今日では大学は単に私たちが学問、研究したことを学生に伝えるだけではなくて、それを社会に還元するということが強く求められています。しかし、その多くは俗に言う産・官・学共同という名前の社会的還元が大変大きく取り上げられ、これに邁進するというのが昨今の多くの大学です。しかし、この産・官・学共同というのは実は、経済界の目下の利益追求に大学の知識を奉仕させるということが主眼となっています。決して市民に学問を開放させるということに直接結びつかない。しかし大学というのはそういう一部の利益に奉仕することではなくて、もっと広い社会構成員に大学の知識を広める、公開するということが本当の意味での大学の開放ではないかと私たちは考えます。実はこのような考えにいたったのは、森をめぐる私たちが市民と交流する中で、だんだんと私たちに気づかせてくれた、森がそれを教えてくれたというのが、われわれにとってひとつの教訓ではないかと思えます。また市民の皆さんも、数ある里山の活動の中でこの龍谷大学の森に大変熱い思いを寄せていただいているのは、大津市という都市近郊の里山を大学が持っているという、ある意味得がたい、入りやすい公共の場を活動の場とするということであり、そこに大学の研究者の知識の集積という資源があるということも加わって、他の里山活動とは異なったものがあるというある期待を寄せていただいている、ということではないかと、大変勝手ですが想像しているわけです。

さて、先程の河合先生のご講演の「森あそびのすすめ」、大変おもしろく、感銘深く聞かせていただきましたが、先生が唱えられた「森のあそび」というのはまさしく、私たちが「龍谷の森」で行ってきた活動そのものではないか、我が意を得たりという思いがいたします。しかし、学問の府である大学で「あそび」というのはいったい何なのか、自己矛盾ではないか、というそりがあるかもしれませんが、実は自然との交流の中の「あそび」というのは、人間がサルから分かれたその第一歩だったのではないか、サル学の専門の先生を前にしておこがましいのですが、そんな風に私は考えています。自然というのは、自分が知恵を出して自然を研究しない限り、決して遊んでくれません。これは私の経験でそういうことがよく分かります。ところが今や、皆さんのあそび、子供のあそびまで含めて、「あそび」というのは、商品になってしまい、経済学の教科書の中であそびを商品とする、そういうことが謳われています。しかし、森の中での知的な

冒険と発見というあそびは、これは商品にはならない。経済学の教科書には載っていません。「森あそび」というのは、決して今流行のマネーゲームでは得られない喜びを私たちに教えてくれるものではないか、こんな風に私たち「龍谷の森」のメンバーは考えています。そうするとひょっとしたら、マネー、お金ということではない新しい価値、喜びを価値とする、そういう学問、あるいは経済学があってもいいのではないかというふうに私自身は考えています。

このことはまた、大人の市民だけではなくて、自然の中で遊ぶ事を教えられていない子供たち、小学生にも当てはまるわけで、ビデオでお見せしましたように森の中で小学生は実に生き生きと動きまわります。木を切るのなんて初めてだという子供たちがたくさんいます。木を切ってもいいんだ、森は再生するんだということを学んで、目を輝かせて、そこでたくさんの自然の知恵を学んで帰るわけです。今は子供たちの多くが、バーチャル画面のゲームに脳を占領されています。そこに繰り広げられるたくさんの戦闘的場面がテレビゲームの中にはこれでもか、これでもかと出てまいります、そのようなゲームに慣れてしまい命の尊さを理解できないという子供たちが増える。その結果として、子供たちが引き起こす痛ましい事件が毎日のように報道されております。龍谷の森の中でひとときを過ごし、本当の命があふれる森の生活を知った子供たちが生き生きとした顔をして帰っていく、そのような小学生たちがたくさんいます。大学がこうして地域の子供たちの教育に関わるということを私たちはここで学んだわけであります。

もちろん、大学生も、自然の知識については小学生と大差ありません。大学生というのはすぐ次の世代を担う大切な人材ですが、彼らは自然を切り取られた街の中で住んでおりまして、地球環境の問題を教科書では習いますが、本当の自然というものを学んでいません。ところが、地球環境の異変はすぐ目の前、只今の最重要課題というわけでありますから、環境教育は大学生こそ今すぐに受けなければならない必須の教育です。森の中の環境教育は学生を感情豊かな社会人に育てる大学教育のこれからの柱とならなければならないと思われまます。

もうひとつ、この「龍谷の森」の活動の中で私が感じたことは、森の中で人々はたいへん顔を輝かせることです。「次の森の作業が待ち遠しい」、「なぜ早く龍谷の森の次の会の活動の知らせをくれないのか」という催促のお便りをたくさんいただきます。このような市民の交流との中で私たちが得た率直な感想は、森は人々に生きる力を授けてくれ

る、森は癒しの力を作ってくれる、ということです。この力は高齢化社会の真只中にある日本の救世主となるかもしれません。今、龍谷大学はお隣の滋賀医科大学とともに、森が作る癒しの力の共同研究を始めたところです。これもやはり森が教えてくれた新しい学問と言えます。もちろん森自身もつ環境保全の力、特に炭酸ガスの吸収源としての力です。地球上の余分な炭酸ガスを吸収する場所はこれ以外にありえません。森のもつこの力の研究も大きな課題ですが、幸い瀬田キャンパスには環境ソリューション工学科が誕生しまして、今その研究を始めたところであります。

産業界はまだ環境学、環境とといいますと産業の発展を阻害するという偏見を捨て切れていません。しかし、環境や安全性を忘却した技術社会がどのようなものか、これはいくらかでも例があるわけです。アメリカのハリケーンカトリーヌがもたらした災害、これは確実に環境を無視してアメリカが経済成長を推し進めた結果であります。また、環境とは少し関係がありませんが、JRの事故、崩壊の危険のビル、これは安全性を全くないがしろにしたかりそめの技術社会が作った結果ではないかと思えるのです。そうすると森から始まる環境学が、地球を救う日というのはすぐ近くに来ているのではないかと、これもまた森が教えてくれたわけであります。こうしてみると、森は大変多くの新しい学問、また本当の意味での大学の開放のあり方を教えてくれたのではないかと、森に感謝をしなければならないと私は考えるわけです。森を通して新しい大学の研究を作る、それに市民、小学生、もちろん大学生もと一緒にそれに加わる。こうして教育者が教育される。こうして新しい学問の発展が図られるという、理想的な大学の姿が森を通して始まったのではないかと、これは私たちが勝手に思い込んでいるところであります。是非これ以降の討論で「龍谷の森」に関わっておられる市民の代表であります杉江さん、それから学生の皆さん、あるいは会場から、ご批判をいただきたいと思っております。簡単ではありますが、森が作った新しい学問の生き方という私の思いをビデオと共に紹介させていただきました。どうもありがとうございました。